2019.5.26

大草

**唯識思想とコンプライアンス**

第○章　唯識思想とコンプライアンス

目次

１．はじめに

２．唯識思想の概要

　2.1　唯識とは

　2.2　深層からの健康

　2.3　表層心と深層心

　2.4　正聞薫習

　2.5　安危同一

2.6　五位百法

　2.7　阿頼耶識縁起

　2.8　円成実性の世界

３．コンプライアンス違反とは

3.1　事例1　タバコのポイ捨て

　3.2　事例2　掃除

　3.3　事例3　ゴーン氏の行為

４．今後のあり方

　4.1　コンプライアンスの種子と薫習

　4.2　コンプライアンスの表象

５．まとめ

**１．はじめに**

この小論文の目的は、唯識思想の概要を説明し、唯識思想による心と物質の分析が今日のコンプライアンスの向上に非常に役立つ側面を持っていることを説明することである。唯識思想では、心を重んじる思想で心のありようにより、その行為の結果が左右されると考える。この世界には、心に映し出される表象以外は存在自体がないとする立場である。

この唯識思想は、4世紀にインドの僧侶の無著と世親という兄弟によって完成された仏教上の思想である。この唯識思想は、空海や最澄も学んだ学問であり、日本の伝統仏教では、仏教学の基礎学と位置付けられた。一人前の学問僧になるためには必須の学問であった。

仏教の宗派では、南都六宗の一つである法相宗の基本思想となっている。法相宗の総本山は奈良興福寺である。

**２．唯識思想の概要**

　唯識思想は、心と物質に関して詳細な分析をしており、たいへん難解な思想である。その概要は以下の通りである。

2.1　唯識とは[[1]](#footnote-1)

唯識とは、心に映し出された表象をあらわす。ただ表象があるのみで、外界の存在物はないという思想である。唯とは「ただ…のみ」という意味である。また表象とは、ことばや音楽などによって心につくりだされる心理的な形や姿をさし、イメージとして理解される。

「識」とは、視・聴・嗅・味・触覚器官及び思考力を媒介とする六種の認識機能（六識）のことをさす。広義の「識」には「意」と「心」も含むとされる。そして、「意」は「識」に伴う自我意識（末那識）をあらわし、「心」は通常の認識機能の根底にある潜在意識（阿頼耶識）をあらわすとされている。

この六種の認識機能（識）と自我意識（末那識）とは、潜在意識（阿頼耶識）に対し「現勢的な識」といわれる。潜在意識が現勢化し、現勢的な識がその余力を潜在意識としてのこすことが「識の変化」といわれる。認識の機能をただその現勢的なあり方においてのみとらえるのではなく、機能の根底に自我意識や潜在意識のあることを認めて、それらをも「識」とよぶところに唯識学派の識論の特色がある。「識」が自らの作用を知らしめる標識が表象であるとされている。

仏教においては、原始仏教以来、人間存在は諸種の構成要素の集まりとみなされ、構成要素以外に恒常不変の自己（アートマン）があるという見解は否定されている。ブッダの入滅後100年ころからブッダの教え（ダルマ）に対する（アビ）考究がなされ、アビダルマ哲学として紀元500年ころまでに集大成された。その文献は、経蔵（経典）・律蔵（戒律書）・論蔵（注釈書）の三蔵である。

アビダルマ哲学者たちは、考察の範囲を広げ人間存在を超えて人間のかかわる世界にまで及ぼし、究極的な存在要素を（１）物理的な存在（色）　（２）心　（３）心作用（心所）　（４）心に伴わぬもの（不相応行）　（５）無制約的な物（無為）の五種に分類した。唯識体系においては、心すなわち識がこれらのすべての存在要素を統合すると考えられる。さまざまの知的・感情的・意志的な心作用は心を離れてあるものではない。心と心作用は同一の認識器官を媒介としておこり、同一の対象をもち、同一の時にはたらく。心はつねに諸種の心作用と連合しているのである。そして物質の存在も実は心のあらわれにほかならないとされる。これらの詳細は、後掲2.6五位百法で説明する。

唯識思想では、世界は心の中に収められ、その心は生じた瞬間に滅して、次の瞬間の心と交替し、こうして生滅する心が一つの流を形成する。人間存在は「心の流れ」であり、心を離れて外界に存在すると一般に認められているものも、心が生み出した表象にすぎない。外界の物質的存在が心に映写されて表象が形成されるのではなく、心が自ら表象を生み出すとされている。このような唯識思想は、大乗仏教における観念論の哲学と性格づけられている。

2.2　深層からの健康[[2]](#footnote-2)

不健康とは、煩悩を持った心のことをさし、健康とは、心に煩悩のない状態をさす。煩悩には、六つの根本煩悩とそれから派生する二十の随煩悩があるという。

ⅰ．煩悩（六つの根本煩悩）

（１）貪（とん）：むさぼる心

（２）瞋（じん）：いかる心

（３）癡（ち）：おろかな心

（４）慢（まん）：おごりたかぶる心

（５）疑（ぎ）：疑う心

（６）悪見（あくけん）：正しくない見解

ⅱ．随煩悩（根本の煩悩から生じる二十の付随的な煩悩）

忿（ふん）：いかる心、恨（こん）：うらむ心、覆：罪をかくす心、悩：いかり咬みつく心、嫉：ねたむ心、慳（けん）：ケチな心、誑（こう）：あざむく心、諂(てん)：騙しへつらう心、害：がいする心、憍（きょう）：おごりよいしれる心、無慚：自らに恥じない心、

無愧：他人に恥じない心、掉挙（じょうこ）：動くさわがしい心、

惛沈（こんじん）：重く沈んだ心、不信：しんじない心、懈怠：おこたる心、

放逸：なまける心、失念：わすれる心、散乱：みだれる心、不正知：まちがって知る心

2.3　表層心と深層心2

表層心は、眼、耳、鼻、舌、身、意の六識から構成されている。この表層心の中に煩悩が生じ、これを纏位（てんい）の煩悩とよぶ。纏位の煩悩とは、まとわりつく煩悩のことをいう。表層心から深層心に蒔かれた煩悩の種子[[3]](#footnote-3)（しゅうじ）は、その種子から再び表層心に煩悩が生まれるとされ、これを相縛（煩悩）という。例えば、憎い、許せない、欲しいなどの煩悩がある。

深層心は、末那識（自我意識）と阿頼耶識（潜在意識）から構成されている。この深層心の中に生じた煩悩を随眠位（すいめんい）の煩悩という。随眠位の煩悩とは、眠っている状態の煩悩のことをいう。表層心の中にある相縛（煩悩）は、深層心に麁重爆（そじゅうばく）という煩悩の種子を植えつける。そして、この麁重爆の種子が成長し、表層心に新たな相縛（煩悩）を生じさせるとされている。

このように、煩悩の種子は表層心と深層心を巡るので止むことがない。この種子を何とかせねばならない。煩悩の種子でなく、善に繋がる種子を蒔く必要があり、いわば、コンプライアンスの種子（善の種子）を阿頼耶識に蒔くことが重要であると筆者は考える。唯識思想においては、阿頼耶識の浄化は正しい教えを繰り返し学ぶこと（正聞薫習：しょうもんくんじゅう）で可能となるとされている。このことは、「現行（げんぎょう）は、その種子を阿頼耶識中に薫習する」と説明されている。

2.4　正聞薫習（しょうもんくんじゅう）2

正しい教えを何度も繰り返して、聞く・読むなどして学ぶことを正聞薫習という。この正聞薫習を通じて、阿頼耶識（深層心=潜在意識）を浄化する。そうすれば、阿頼耶識に潜在する「清浄な種子（しゅうじ）」が生育し、正しい行為に繋がってくるというのである。

2.5　安危同一2

阿頼耶識と身体のいずれかが安らげば、他方も安らかになるという関係が存在するとされる。一方、いずれかが危うい状態になれば、他方も危うくなるという。

身体の具合は、深層心に原因があり、深層心のありようは身体のありように左右される（表層心と深層心は相関関係にある）という。このため、真の健康は、深層心の健康にまで深めなければならないとされる。従って、表層の身体のありようには、常に留意しなければならない。姿勢を正す、運動する、過食しないなどが、阿頼耶識によい影響を与えることに繋がるのである。

2.6　五位百法[[4]](#footnote-4)

唯識では全ての事象を五位百法という形に分類している。大きな分類として、心、心所、色、不相応行、無為の五種類に分けこれを五位とよび、さらに細かく百種類に分類したものを百法という。

五位百法の概要は以下の通りである。

① 心（8種）とは、物事を認識する心の働き一般のことをいう。心には、眼・耳・鼻・舌・身・意の六識と末那識（自我意識）・阿頼耶識（潜在意識）の8種がある。

② 心所（51種）とは、心の中心体を王に例えて心王とよぶことがあり、この心王が所有する細かい心作用のことをいう。心所は、心王によって生じ、心王と相対応して同時に働き、心王に属しているとされる。心所が心王と相対応して同時に働くことを「相応」という。細かい心所として51種をたて、それらを6種（遍行・別境・善・煩悩・随煩悩・不定）に分類する。なお、用語の説明は省略する。

 　　(ⅰ) 遍行（善悪を超えた普遍的な心）として、作意・触・受・想・思の５種。

 　　(ⅱ) 別境（特定対象に関連して起こる心）として、欲・勝解・念・定・慧の５種。

 　　(ⅲ) 不定（縁により善または悪となりうる心）として、悔・睡眠・尋・伺の４種。

 　　(ⅳ) 善（よい心作用）として、信・慚・愧・無貪・無瞋・無癡・勤・軽安・

不放逸・行捨・不害の11種。

 　　(ⅴ) 煩悩（基本的煩悩）として、貪・瞋・癡・慢・疑・悪見の6種。

 　　(ⅵ) 随煩悩（基本的煩悩に付随する煩悩）として、忿・恨・覆・悩・嫉・慳・誑・諂・害・憍・無慚・無愧・掉挙・惛沈・不信・懈怠・放逸・失念・散乱・不正知の20種。

③ 色（変化する物質的なもの（11種））とは、肉体と自然界の構成要素をいい、現代でいう物質のことである。このうち肉体の構成要素をまとめて五根（眼根・耳根・鼻根・舌根・身根）という。次に五根により認識される対象となる自然界の構成要素をまとめて五境（色・声・香・味・触）という。さらに五根による認識の対象とならず、ただ意識だけによる認識の対象となる特別の物質として法処所摂色をあげる。合計11種のものをさす。

④ 不相応行（以上のいずれでもない存在（24種））とは、心でも物質でもない存在をいう。科学的な見方では、存在するものは心か物質のいずれかであるが、仏教では、それらのいずれでもないものをたて、それに不相応行という名を与えた。心でもなく物質でもない存在の分かり易い具体事例として、時間、数、名前、文章、言葉などがあげられよう。

この不相応行には、得・命根・衆同分・異生性・無想定・滅尽定・無想報・名身・句身・文身・生・老・住・無常・流転・定異・相応・勢速・次第・方・時・数・和合性・不和合性の24種があるとされる。これらの用語の説明は省略する。

⑤ 無為（6種）とは、「作られないもの」すなわち非現象的な存在をいう。物質と心を色、受、想、行、識の五つに分ける分類法には非現象的存在である無為が含まれていない。この点を考察して、新たに無為を含めて、現象と非現象とのいずれをも含めて、全てのことを分類したのが、この五位説である。虚空・択滅・非択滅・不動滅・想受滅・真如の6種の無為があるとされる（この五位説には、説一切有部と瑜伽行派との間に見解の相違があるが詳細は省略する。本稿では、瑜伽行派の説による）。

（ⅰ）虚空無為

　虚空とは、物質的なものが何も入っていない広大無辺な空間をいう。真如（永久不変の真理）があらゆる心のさまたげを離れていることが、あたかも虚空があらゆる物質的なさまたげを離れていることに似ているから、真如を仮に虚空無為とよぶ。

（ⅱ）択滅無為

　択力（選び取る力）によって得られた滅（智慧の力）により煩悩が消えて明浄な心で真如を知ることができる。このように真如は煩悩を滅することにより得られるので、真如のことを択滅無為とよぶ。

（ⅲ）非択滅無為

　　択滅無為は、智慧の力により煩悩を滅して得られる真如のことであったが、非拓滅無為はそのような方法によらないで得られる真如をさす。非択滅無為には、①本性清浄の真如と②縁闕（えんけつ）所顕の真如の二つがある。

①は、心は本来的に自性清浄心であるという事実を強調するために出された考えである。②は、生ずる縁が欠けて有為法が生じないときに自ずと真如（永久不変の真理）が現れてくるとする考えである。

（ⅳ）不動無為

　不動無為とは、三つの受すなわち苦受、楽受、不苦不楽受（捨受）のうち、苦受と楽受との二つが色界の中で滅したときに現れる真如のことをいう。苦にも楽にも偏しない心の確立を「不動」とよび、そのときに真如が現れてくるとされる。この真如を不動無為という。

（ⅴ）相受滅無為

　相受滅無為とは、無色界の最高天すなわち有頂天で、相と受が滅し捨受も含めてあらゆる受を滅したときに現れてくる真如のことをいう。

（ⅵ）真如無為

　上記の（ⅰ）～（ⅴ）の五つの無為は、本来的に全て真如そのものに帰せしめられる。諸存在の本性は、真実にして如常であるから、真如という。すなわち、現象的存在の本性は虚妄ではなく真実でありかつ変化することなく常住にしてあるが如（まま）のものであるから、真如とよばれこれを真如無為という。

これまでみてきたように、心に8種、心所に51種、色に11種、不相応に24種、無為に6種あり、合計100の法（もの）がある。全ての存在はこの百法のうちいずれかに該当することになる。なお、唯識思想では、この百法に該当するものが全て存在するとの執着が生まれる可能性があるため、有るようにみえるが実際にはないことを示すために二無我をたてている。二無我とは、人無我と法無我の二つである。人も物も有るようで無いという趣旨である。これまで五位百法の概要をみてきたが、これらも全て心に生じる表象が唯あるのみで、実体はないことを示すのであるという。

以上のような唯識思想がどのようにコンプライアンスと関係してくるのか、筆者には明らかにすることは難しいが、コンプライアンスも心の中の表象であり、外界にその実体は無いということになるのであろう。そうであれば、いくらコンプライアンスの重要性を強調しても意味をなさないことになり、悪を為さず善を為すということも無意味となってしまい兼ねない（唯識は、コンプライアンスに対してプラスに働かないことにもなり兼ねない）。

このことは、仏教において南無阿弥陀仏と唱えるだけで往生できるとの思想を都合よく解して念仏を唱えるだけで極楽往生できるのであれば、悪事をはたらいてもかまわないとする考えに通じるものがある。しかし、仏教では経典や戒律があり諸悪莫作（悪を為してなならない）衆善奉行（善を為す）の思想があり、都合よく仏教を利用してはならない。

2.7　阿頼耶識縁起[[5]](#footnote-5)

　　　表層の行為のありようが、深層の阿頼耶識に影響を与えるのであり、表層の行為は必ず深層の心に影響を与えるという理のことを「阿頼耶識縁起」という。この理に気付けば、私たちは一瞬一瞬の自分のありようを正していかねばならないと考えるようになる。

　　　「自分のありよう」を分析すると、身体的、言語的、精神的な三つに分かれるとされる。いわゆる身・語・意の三業（さんごう）といわれるもので、前の身と語の二つは、後の意業（すなわち意思の働き）から生じてくるとされる。なにか身体を動かす、あるいは語るという行為の奥には必ず意思があるということである。

　　　以下の「　」内は横山紘一氏の見解である。「意思という、すべての行為を生じさせるこの根源的な心の働きに、私たちはほとんど注意を向けていないといわれる。しかし、この意思に注意を向けるとそれまでと違う観点から考えるようになる。例えば、今日は何をしたいのかと自分の心の中の「意思」に問いかけてみる。すると、「今日は掃除をしなければならないのだ」という義務的な言葉ではなく、「今日は掃除をしたい」という願望的な言葉が心の中に生じてくる。」

上記と同様のことがコンプライアンスについても当てはまりそうである。小さなコンプライアンスをいつも唱えていると、深層心にコンプライアンスという種子を植えつけることができ、やがて大きなコンプライアンス意識が芽生え、次にその実践がなされることに繋がっていくのではないだろうか。また、自分がコンプライアンス違反をしようとしていると仮定する。違反行為を実行することは、自分の心を汚すこととなり、阿頼耶識に不正の種子を撒くことにほかならないと自覚することができる。そして次に、その種子は更に大きな悪を生む種子に繋がると考えて、悪行を思い止まることができるのではないだろうか。

2.8　円成実性の世界4

唯識思想においては、この世界を次の三つの観点から考察し、円成実性を理想の世界として描いている。

ⅰ遍計所執性（へんげしょしゅうじょう）：「自分」と「もの」に執着して生きる世界。

ⅱ依他起性（いたきしょう）：他に依って生起するもの。他の力によって生かされてある世界。

ⅲ円成実性（えんじょうじっしょう）：清らかに成りきった世界。

以下の「　」内は横山紘一氏の見解である。

「手足・心臓・胃など60兆の細胞からなるこの身体の隅々までが、自分のいのちを支えてくれている。これは感謝の気持ちに繋がるものである。自分は「依他起性」の世界に生きている。生きているというより生かされてあるというのが事実といえよう。不平不満の気持ちを感謝の気持ちに切り替えてみてはどうか。自分のものでない、全ての臓器・細胞に感謝し、どうか今日一日も元気で過ごさせてくださいと手を合わせて祈ると感謝する心が深層の心に影響を与え、心の底から浄化されていく。そうすることで清らかに成りきった心で生きる世界に通じることができよう。それは、仏陀のみが生きることのできるとされている世界に通じるものである。それを「円成実性の世界に生きる」という。その世界にいつか至ることを理想として、清浄な世界を目指して一歩一歩歩み続ける決心をするだけで生きる勇気がわいてくるものである。」

**３．コンプライアンス違反とは**

コンプライアンス違反は心の病の顕現化したものと筆者は考える。唯識思想では、心の病とは、心に煩悩がある状態のことをさしている。具体的な事例で考えてみよう。

3.1　事例1．タバコのポイ捨て

　　　タバコの吸い殻を捨てる行為は、一般的な公衆道徳に反する行為であるが、この行為は本人の表層心を汚すことに繋がっており、しかも深層の心を汚していることに本人は気が付かない。小さなことでも「塵も積もれば山となる」という諺と同じように、知らず知らずのうちに、自分を深層から悪い方向に変えて行っていることに気付かねばならない。

3.2　事例2.　掃除

　　　寺院に居住する僧侶には作務の一つとして毎朝の掃除が課せられる。僧侶は、この掃除をする義務を怠ることは許されない。掃除をせねばならないという義務から掃除をしたいという願望に気持ちを変えることが大切であるとされる。そのためには、掃除することに成りきる必要があるという。成りきるとは、自分と他者と行為を区別せずに行動することであるという。この区別しないという無分別智が、深層の心を浄化する。自然には、分別やはからいはない。ただ成りきることで、人に感動を与えることができる。行住坐臥（日常の何でもない所作）の行為にも唯だ成りきることが大切である。

　　　「無分別智」とは「自分」と「他者」を分別しない智慧であり、この智慧が深層の心の浄化に大きく貢献するので、大変重要である。

　　　筆者は、形式的なことでもそれを繰り返し行うことで、深層心（阿頼耶識）にコンプライアンスの種子を撒くことになり、やがて立派なコンプライアンスの樹木の芽が出ることに繋がると考えており、さらに企業のコンプライアンスの向上に繋がっていくものと考える。

3.3　事例3.　ゴーン氏の行為

　　　日産自動車(株)の元会長は、日産の資産を個人的に流用したとされ特別背任罪で逮捕された。もともと20億円の莫大な年収を得ているにも関わらず、会社の資産、経費を私的に使ったというのである。それも日産だけに止まらずルノーでも同様のことを行っているとのことである。人間の欲には限りがなく、煩悩に苛まれた果ての姿がゴーン氏に見える。自分の表層心だけでなく深層心から守銭奴という悪の花が開いてしまったといえるのではないか。

　　　筆者は、不正を行う心は、煩悩にとらわれた心であり不健康な状態にあると考える。不健康な心の状態から、健康な心になるためには、心を浄化し煩悩にとらわれない心にすることが必要である。即ち、円成実性の項で述べたように、清浄な世界を目指して一歩一歩歩み続けることが、コンプライアンス向上の心に通じると考える。ゴーン氏には、感謝する心がないために深層の心が浄化されることなく、悪の花が次々と咲くということができるのではないか。

**４．今後のあり方**

4.1　コンプライアンスの種子と薫習

　　唯識思想によると、全ての行為は阿頼耶識(潜在意識)の中に存在する悪の種子が芽生え成長することにより、末那識（自我意識）に影響を与え、具体的な行動になってくると考えられる。そして、その阿頼耶識に悪い種子を撒くのは何気なく行う行為が末那識に影響を与え、遂には阿頼耶識に悪の種子を撒くと考えられている。

私たちは、このように知らない間に小さなよくない行為をすることにより、心の深層ともいえる阿頼耶識を汚しているのである。すなわち、日常のよくない行為が深層の阿頼耶識（潜在意識）を汚し、悪の種子を撒いているのである。このようなことを理解した上で、日常の行為を正す必要がある。

それでは、これらの唯識思想を企業経営やコンプライアンスについて当てはめてみることにする。日常の企業活動における全ての行為が表層心（末那識）に影響を与え、悪い行為であれば悪い種子を植えつけ、逆に正しい行為であれば正しい種子を植えつけることになる。そしてその表層心（末那識）に生じた種子は、深層心（阿頼耶識）に種子として蒔かれることになる。従って、コンプライアンス意識に関する注意喚起や研修を繰り返し行うこと（薫習）により、全社員の深層心（阿頼耶識）にコンプライアンスというよき種子を撒くことになる。その結果、その種子が発芽し育ってくることにより、コンプライアンス経営が実現され、企業から不祥事が消えていくといえよう。この意味でコンプライアンス意識の注意喚起や研修が、コンプライアンス確保のための有効な手段と成り得るのである。なお、コンプライアンスの注意喚起や研修は正しく効果的に行われる必要がある。どんなものでも実施すればよいというものでない。

同時に、日常の企業活動において、小さな不道徳や不正行為を繰り返し行えば、悪の種子を表層心（末那識）と深層心（阿頼耶識）に植え付けることとなり、様々な不祥事となって表に出てくるため、日常の小さな活動も疎かにできないことが理解できよう。小さな不道徳、小さな不正と雖も見過ごすことができないのはこのためである。

　4.2　コンプライアンスの表象

　　唯識の立場からみると、コンプライアンス違反を行う人の意思とは、深層心（阿頼耶識）に蒔かれた悪の種子が芽生え育った結果、具体的な行動となって表面化してきたものと考えるのである。

　　このように考えると、これまでみてきた唯識思想を現代の企業経営者を中心として企業内に広めていくことが、企業全体のコンプライアンス意識を高めていくことに繋がってくるのである。唯識思想という言葉でなくても、よいことを繰り返して伝えていくことにより同じ結果が得られると考える。

　　このように人間の心にアプローチしていく唯識思想のあり方がコンプライアンス水準を向上させていく一つの有力な方法といえるのではないかと筆者は考えている。

　　次に唯識思想では、存在するのは心の中に映し出された表象のみであり、その表象から産みだされた全現象に実体は無いとされる。よく考えてみれば、心の中の表象は何かの現象があって初めて映し出されるものではなく、その逆であり、心の中の表象が外界の全現象を作り出すのである。心の中に映し出された表象が善であれば、当然外界の現象も善として現れてくる。この外界の現象と心の中の表象との間に齟齬はないのである。そうであれば、コンプライアンスについても、表象において善ならば外界の現象においても善となる。従って、コンプライアンスを確保して行くためには、心の中に正しい種子を植えつけて育てていかなければならない。この世界は実体のない現象であるから、コンプライアンスを軽視してよいということにはならないといえよう。

**５．まとめ**

これまでみてきたように、仏教における唯識思想においては、正しい教えを繰り返して学ぶ（薫じる）ことにより、心の深層に正しい種子が蒔かれることになる。

そしてその蒔かれた正しい種子は芽生え、成長しやがて正しい行いとして現象化していくと考えるのである。そうであれば、コンプライアンスについても、コンプライアンスの正しい教えを繰り返して伝えていくことにより、潜在意識に影響を与え、やがてコンプライアンス経営という清らかな華が咲くであろう。

即席の対症療法では、真のコンプライアンス経営の確保は難しい。時間はかかっても、心の深層に響くコンプライアンス諸活動を継続していくことにより、組織体質が少しずつ変わっていくことになる。手間暇と長い時間のかかる注意喚起と研修が、本当のコンプライアンス確保には必要なのである。

日本の企業の中で、正しくコンプライアンス経営のなされている企業は、日常の諸活動が正しく行われ様々な正しい教育・訓練が繰り返し実施され、しっかりした企業体質をもつ企業に発展してきたものと考えられる。

なお、この小論文では、唯識思想をもとに心の側面からコンプライアンスを考えてきたが、コンプライアンス確保のためのガバナンスや不正防止策などのハード面での対策も同時進行で実施することも大切である。また、この論考では、唯識思想をもとにした心のあり方の面からのみコンプライアンスをとらえたにすぎない。この二点を敢えて付言しておきたい。

以上

1. 服部正明・上山春平「仏教の思想４　認識と超越　<唯識>」（角川書店1969.6）を参照。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 横山紘一「唯識」深層からの健康　NHK教育TV「こころの時代」（1997）を参照。　 [↑](#footnote-ref-2)
3. 種子（しゅうじ）とは、唯識の用語で、植物の種子と同じようにいろいろの現象を起こさせる可能力のことをいう。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 横山紘一「阿頼耶識の発見　よくわかる唯識入門」（幻冬舎2011.3）及び同「唯識とは何か」（春秋社1986.7）を参照。　 [↑](#footnote-ref-4)
5. 横山紘一「唯識の思想」（講談社2016.3）を参照。 [↑](#footnote-ref-5)